

ねっとわあく

2023/10/31 Vol.80

令和モデルの実現に向けて



変化の波に乗れ！

目次

- ① 令和の子育て世代にきいたジェンダー観
- ③ イマドキ幼児教育
～「その子らしさ」が尊重される時代へ～
- ⑤ 働く女性たちのこれまで
～昭和・平成の28歳の私～
- ⑧ 幸せな働き方のレシピ
いちぼし堂の取り組み
- ⑩ 2022 磐田市観光大使が対談
～誰もが輝ける社会を目指して～
男女共同参画に大切なコト
- ⑬ 教えて荘司先生！ 子宮頸がん と HPV ワクチン
- ⑮ 「ねっとわあく」アーカイブ
45号「女子学生の就職活動」より

変化の波に乗れ！

～令和モデルの実現に向けて～

2023年の日本のジェンダーギャップ指数※1は過去最低の146カ国中125位。振り返ってみると、「男性は仕事、女性は家庭」というジェンダー観が高度成長期には「あたりまえ」とされていた。男性の長時間労働等の慣行や、女性の家事・育児といった無償労働の負担など、昭和から続く性別で役割を二分化する考え方がいまだに根深く残っている。日本のジェンダー意識は、まだまだ低いのが現状だ。

とはいえ、時代は昭和から平成を経て令和へ。多様性が求められる社会で、若年層を中心に人々の意識は変わってきている。「令和5年版男女共同参画白書」※2では、若年女性の就業に対する意欲の高さや、若年男性の家事・育児等への参画意欲の高さなどに触れている。ここでは、職業観・家庭観が大きく変化する中で、性別役割分担意識といった昭和的な考え方（＝「昭和モデル」）から脱却し、全ての人が希望に応じて、家庭でも仕事でも活躍できる「令和モデル」の実現について考察している。そのためには、価値観やライフスタイルの変化について大人が理解し、日本の未来を担う若い世代のために社会の仕組みや制度を時代に合ったものに変えていく必要がある。

今号のテーマは「変化の波に乗れ！～令和モデルの実現に向けて～」。家庭、教育現場、働き方、地域活動において、「令和モデル」の実現、そしてジェンダー平等の実現のために今できる事を考えてみよう。

※1 世界経済フォーラムが毎年発表している、国ごとの

男女の格差の状態や度合いを示す指数

（ジェンダーとは…生物学的な性ではなく、社会的・

文化的につくられた性差、社会的規範）

※2 内閣府男女共同参画局発行

[https://www.gender.go.jp/about_danjo/](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/index.html)

[whitepaper/index.html](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/index.html)

きいたジェンダー観

これは、昭和に根付いた「男性、女性という性別を理由とに関わるものともいえる。そんな空気に触れてきた当時の観を社会に芽吹かせることを期待された。「女の子らしさ」や「男の子らしさ」のジェンダー意識に試みていこう。



家事分担

子どものころ「女だから家事をやりなさい」と言われてきて不満があった。子どもには性別関係なく役割を与えている。（30代女性）

性別関係なく自立した生活を送って欲しいため、小さい頃から息子、娘には料理や洗濯、掃除をやりたと言えばさせてきました。（30代女性）

自分も掃除や料理をしているので、子どもたちはそれが普通だと思っていると思う。（30代男性）

家事能力は男女ともに必要だと思う。（30代女性）



習い事

（息子は）男の子のスポーツとしてサッカーを習っている。（30代女性）

ピアノは女の子のイメージが強い。自分が習っていた時は恥ずかしかった。（40代男性）

うちの息子はピアノもサッカーもやっています。（40代女性）

子どもがやりたいと思ったことはチャレンジしてみれば良いと思っている。（40代女性）



将来の話

性別によって、なれない職業があるのが現状。将来の夢に費やす時間は膨大なので、親子の会話の中でジェンダーのテーマに触れる機会が来るのでは。(40代男性)

男女の視点で子どもの将来に口出しするのは、想像がつかないです。(40代女性)

今は多様な時代なので、性別に関わらず子どもがやりたいことを見つけてほしい。(40代女性)



服装選び



「男の子だからカッコいい服がいい」と息子が言う。(30代女性)

娘は「かわいい」や「スカート」を、息子には「カッコいい」服装を選んでいきます。(30代女性)

スカートやワンピースを着たいという息子に、なぜ着てはいけないか、本人が納得できる答えが見つからず、スカートをはかせた。周囲に受け入れてもらうのは難しかった。(40代女性)

男らしさや女らしさは世間が植え付けたものだと感じている。子どもに強要したくないし、他人にもされたくない。(40代女性)



令和の子育て世代に

約30年前、中学・高校で家庭科の男女共修が始まった。して役割を固定的に分ける」という、ジェンダー観の転換学生は次の社会の担い手として、新しい価値観、ジェンダーその当時の学生が子育て世代となった今、子どもに対してどのように考えているのか。オンラインで集まった声を

あつまった声から 編集員が考えたこと

多くの子育て世代が、性別に関係なく子どもの個性を尊重したいと考えていることが見てとれた。その一方で「ジェンダーバイアス」と呼ばれる「男だから」「女だから」という先入観も残っていると感じた。

では、令和を生きる子どもたちのために、大人はどんなことができるだろうか。子どもの話を聞き、思いを受けとめることはもちろん大事だ。立場や考え方の異なる人の話を聞くことで、自分の中のジェンダーバイアスに気づききっかけにもなるだろう。

令和になり、世の中の流れはジェンダー平等の価値観へと変わっている。ジェンダー意識を子どもに押し付けることなく、親子で話し合うことが子どもの人生の選択肢を増やし、自分らしく活躍できる社会の土壌づくりにつながるのではないだろうか。



子育てにおける ジェンダーを考えてみて

子育てとジェンダーに関して、男性がどう考えるのか興味がある。(40代女性)

無意識のうちに先入観があることが実感できた。(40代男性)

今までジェンダーについて考えたことがなく、自分自身が偏見を持っていたことに驚いた。気付きがあっても長年の思考回路を変えるのは難しく「意識」しながら発言や言動に注意しようと思った。(30代女性)

イマドキ 幼児教育

—「その子らしさ」が尊重される時代へ—



いしかわ みなみ
石川美波先生

まつうらち ほこ
松浦秩保子園長

わたなべ ちさ
渡邊知佐先生

すぎやまのりこ
杉山典郷先生

「ジェンダー平等」の実現を妨げている要因のひとつに、ジェンダーバイアス*がある。では、人はいつからジェンダーバイアスを形成するようになるのか。そんな疑問から、人格形成の基礎を培う幼児期に注目した。先入観や固定観念のない幼児期に、周囲の大人がジェンダーバイアスを押し付けてしまうと、子どもたちはそれを自然に受け入れてしまう恐れがあるのではと考えたからだ。

幼児教育の場は、大きく分けて「家庭」「地域社会」「幼稚園等施設」の3つと考えられている。今回は、「幼稚園等施設」にスポットを当て、静岡市葵区にある「常葉大学附属たちばな幼稚園」の先生方に話を聞いた。

近年の幼児教育はどのように変化しているのだろうか。

※「男はこうあるべき」「女はこうあるべき」などの無意識の思い込み

声かけは男女でかわる？

ねっとわあく編集員（以下ねっと）..

子どもへの声かけでジェンダーの視点から気をつけていることはありますか？（例..「男の子／女の子なんだから〇〇」を言わない等）

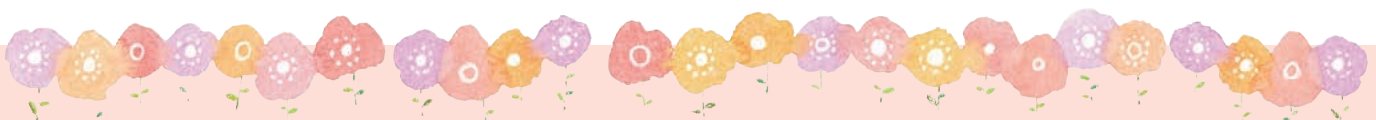
渡邊..昔は「男の子なんだから泣かないよ」や「女の子なんだから優しくね」といった声かけはあったように思います。けれども、今は自然とそのような声かけはなくなりました。10〜15年くらい前からかな。

杉山..男女で声かけの内容が変わるという意識がそもそもなかったです。教員になってから一度も、子どもにそのような声かけをしたことはないように思います。

石川..男女で声かけの内容が変わるのは、トイレ指導の時くらいです。

ねっと..では、子ども同士の会話の中で、ジェンダーバイアスを感じた時、先生が声をかけることはありますか？

石川..そもそも、そういう場面がありません。私には、「子どもの好きなものには、自分も全力



で乗っかりたい」と考えているので、もし、男の子がかわいいのが好きだったとしたら「いいね！先生も好きだよ！」と声かけすると思います。

杉山…「ピンクは女の子の色だよ」のような発言時には、「先生も男だけどピンク好きだよ！」と言ったりしています。

渡邊…私も同じようなフォローをしています。「先生も〇〇好き！好きなものは人それぞれだよね」って。

園長…どの子の意見も否定することなく、寄り添う声かけが大事だと考えています。

ねっと…保育中に子どもを男女で分けるシーンがありますか？

杉山…クラスで並ぶ時は、男女別で二列に並ばせています。

園長…これについては、よく考えたら男女別である必要はなかったかな。**渡邊**…人数を把握しやすくするためをやっています。避難訓練の時などは、誰がいなかかりやすいので。

園長…こちらの便宜上の問題なので、必ずしも男女別で並ぶ必要はないかもしれない。今後、検討してみたいです。

ねっと…数年前、運動会の玉入れが、

男女別でした。その時は、男児が青色で女児が赤色の玉でした。

園長…そうだった？ 気が付かなかった。

渡邊…あまり深く考えていなかったかもしれない。

園長…これまでやってきたことを、そのまま踏襲している部分もあるように思います。

杉山…クラスを半分に分けるために、単純に男女で分けてしまったのかな。今後はチームを決めて、チーム分けにしてもよいと思います。

ジェンダーに関する意識の共有

ねっと…先生方がジェンダー教育について学んだり、研修を受ける機会がありますか？

園長…今のところ、ジェンダー教育に特化した研修はありません。分科会にも、ジェンダーをテーマにしたものはないです。

ねっと…では、先生方の意識のアップデイトはどのようにされているのでしょうか？

園長…保育雑誌やテレビ番組などの

メディアで目にした情報を、教員同士の雑談の中で共有することが多いです。「私たちも、もっと意識を高めないとね」と話しています。

ねっと…ジェンダーに関する意識は、ベテランの先生と若い先生の間に差がありますか？

園長…ある程度、意識は共有できているように思います。もし、差を感じするような場面があったとしても、それについて話し合うことができる土壌はあります。

どの子ども「その子らしく」

園長…当園で一番大事にしていることは、どの子ども「その子らしく」ということ。その象徴として、当園では制服がありません。子どもたちが、好きなもの、好きな色の服を身に着けて登園します。そこに子どもの個性が出るので、私たちも、それを見るのがとても楽しいんです。これから

も、子どもたちが好きなものを好きと言える環境、また、子ども同士がお互いの好きなものを認め合える環境にしていきたいです。

今回の取材を通して、改めて気づかされた部分もありました。今後、時代に合わせて、もっと勉強が必要だなと感じています。

あとがき

子どもたちにとって幼稚園は、家庭から離れて初めて足を踏み入れる社会ともいえる。多様な価値観に触れ、生活や遊びなどの体験を通して、社会性を育み、その後の人格形成の基礎を築いていくのではないだろうか。

今回、先生方から話を聞いて、一人ひとりの個性を大事にすること、多様性を受け入れる姿勢でいることが、結果的にジェンダーにとらわれない教育につながっていると感じた。私たちの子ども時代のような、画一的な教育ではなくなりつつある。

ジェンダーバイアスを次世代に引き継がないためにも、幼児期の子どもを取り巻く環境は、とても重要だ。そのためには、今を生きる私たち大人が、もっと柔軟に、視野を広げて、「その人らしさ」を尊重した社会を作っていかなければならないと思う。